



リケジョのバトンをつなぐ

中村学園大学の沖智之先生からバトンを受け取りました。西九州大学の安田と申します。沖先生とは学会でたびたびお会いするご縁があり、今回ご紹介いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

私は、佐賀大学在学中に田端正明先生の研究室に所属し、分析化学の面白さにのめり込みました。研究テーマは「塩析による相分離現象」。一見混ざり合っているような液体が、ある条件下で突然ふたつに分かれるという不思議な現象に強く惹かれ、昼夜を問わず実験に没頭していた日々を、今でも鮮明に覚えています。

この学生時代の研究の積み重ねが評価され、私は女性として初めて「九州分析化学奨励賞」を受賞する榮譽に恵まれました。記念としていただいた「女神の盾」は、今でも私の研究の原点を思い出させてくれる大切な象徴となっています。

分析化学で培った知識と技術は、その後、食品分野へと進んだ私の研究人生においても大きな礎となっています。対象が変わっても、「見えないものを可視化する」という分析化学の本質は変わりません。分析化学の視点が、今の私の研究活動にも深く影響を与えています。

私自身の原点を振り返る中で、理系分野で活躍する女性たち、いわゆる「リケジョ」について、より広い視点で考えるようになりました。日本では、理系分野における女性研究者の割合は、先進国の中でも依然として低いのが現状です。近年、理系学部に進学する女子学生数は増加傾向にあるものの、大学院進学や研究職への就職は依然として少なく、大きな課題となっています。社会的・制度的な壁が残されており、女性研究者がもっと活躍できるよう、環境を整えることが強く求められています。

日本における最初のリケジョのひとりとして知られるのが黒田チカです。彼女は1884年に佐賀県で生まれ、日本初の女子大学生として東北帝国大学（現在の東北大学）理科大学化学科に入学しました。しかし、当時の文部省からは女子の入学に対する反発の書状が届き、入学後も男子学生から排斥運動が起きるなど、困難な状況下での学生生活を余儀なくされたといわれています。それでも彼女は、紅花やタマネギなどの植物色素の研究に打ち込み、女性として日本で2番目の理学博士号を取得しました。その陰には、彼女のたゆまぬ努力に加え、理解あ

る師や周囲の支援があったことも想像されます。

私自身もまた、進路選択の際に性別による壁を感じた経験があります。高校時代には「女子は文系を選ぶのが望ましい」といった進路指導を受け、その影響もあって、理系に進んだ女子生徒はわずか6人でした。大学の化学科では女子学生が半数近くを占めていたものの、大学院に進んだのは少なく、アカデミックポストに就いたのは私一人でした。

このような経験を通じて、理系を志す女子中高生がさらに増え、自信を持って一步を踏み出せるような環境づくりの重要性を強く感じるようになりました。そうした思いから、現在、他大学と連携し、女子中高生の理系進路を支援する「リケジョプロジェクト」に取り組んでいます。リケフェスと呼ばれる理系体験イベントや出前講義を通じて、先輩リケジョたちがロールモデルとなり、理系分野の魅力ややりがいを伝えています。

では、日本分析化学会における女性研究者の現状はどうでしょうか。本学会では、女性研究者ネットワークの設立、学会誌『Analytical Science』の女性研究者特集号の発行、女性の活躍を称える「女性 Analyst 賞」の創設、さらには年会における託児所の設置など、女性研究者への支援が着実に進められています。中でも、託児所の設置は子育て中の研究者にとってありがたい取り組みです。私自身も息子が幼かった頃、学会に連れて行き、講演中は会場の外のベンチで待たせていたため、集中して発表に臨むことができなかったことを思い出します。

とはいえ、最終的に私が願っているのは、リケジョという言葉自体が過去のものとなり、単に分析化学を志す一人の研究者として自然に認められる未来です。性別による区別を超えて、お互いの才能や努力が正当に評価され、誰もが自信を持って能力を伸ばし、次世代へとそのバトンを確実につなげられる社会の実現を心から望んでいます。

今回のリレーエッセイは、本学子ども学部の飯盛啓生先生にお願いしました。飯盛先生は、分析化学を基礎として、地球環境科学や理科教育に関する研究に取り組まれています。ご多忙の中、快くお引き受けいただき、ありがとうございます。どんなエッセイを書かれるのか、今からとても楽しみにしています。

〔西九州大学 安田 みどり〕